さよなら日本

絵本作家・八島太郎と光子の亡命

宇佐美 承

晶文社

著者について
宇佐美 承（うさみ・しょう）
一九二四年、中国・天津に生まれる。東京大学文学部卒業。五三年朝日新聞入社。同名古屋本社報道部、調査研究室、朝日ジャーナル編集部、図書編集室、出版局編集委員などを経て、現在、出版局嘱託。
著書―『真実と勇気の記録』（筑摩書房）、『ルルの家の絵かきさん』（偕成社）ほか共著多数

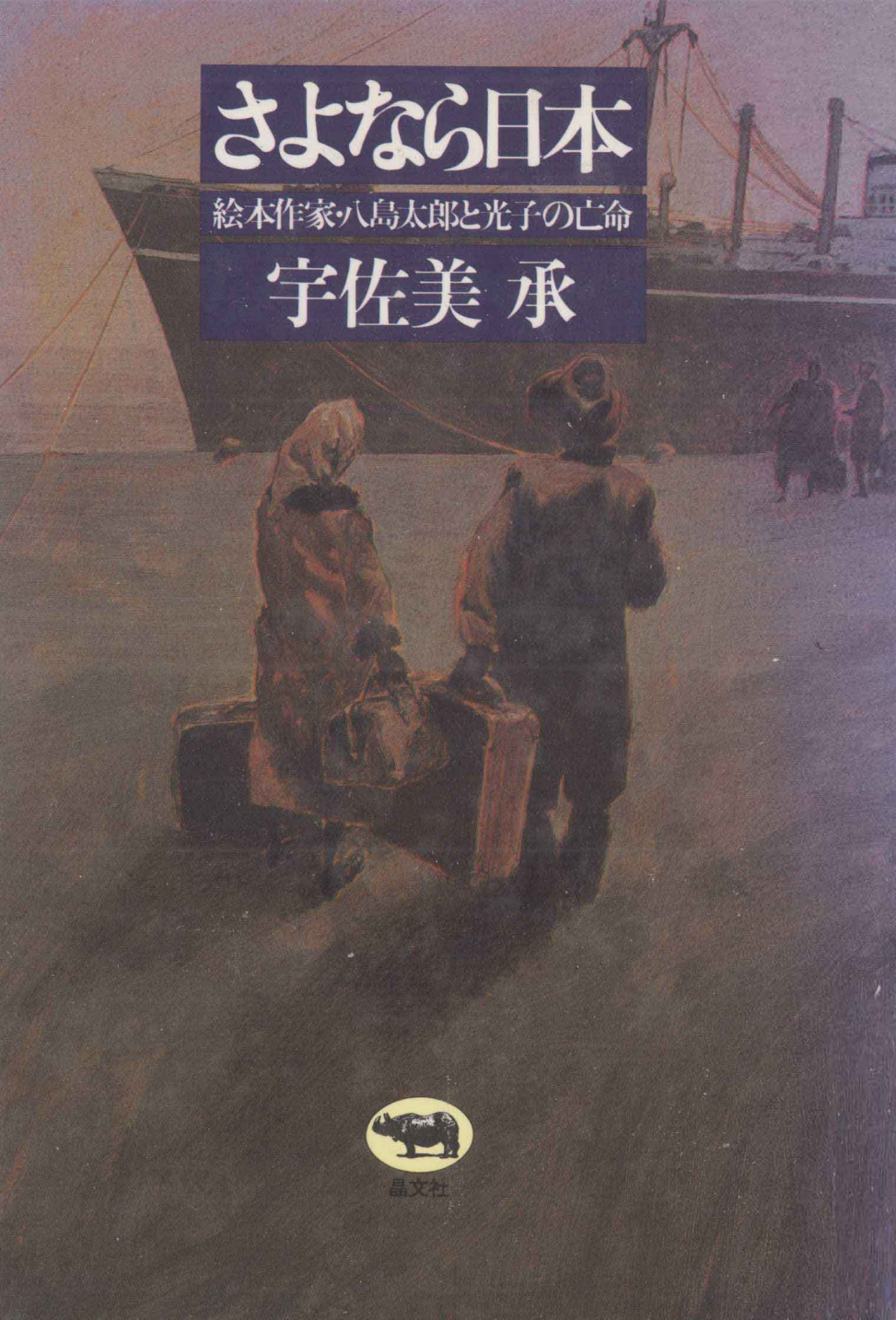
さよなら日本　絵本作家・八島太郎と光子の亡命

一九八一年一一月三〇日発行
著者　宇佐美 承
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六―六二七九九
壮光舎印刷・美行製本
© 1981 Shō Usami
Printed in Japan
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

さよなら日本

絵本作家・八島太郎と光子の亡命

宇佐美 承



晶文社

晶文社　定価1300円　0023-5640-3091

さよなら日本

絵本作家・八島太郎と光子の亡命

宇佐美承

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン　平野甲賀

さよなら日本――絵本作家・八島太郎と光子の亡命　目次

1 ジュニとトネ 11
2 郷士の末裔 28
3 神の授け子 56
4 疾風怒濤 91
5 ミナト・コウベ 143

6 ニューヨーク貧民街 167
7 祖国を敵として 201
8 わかれみち 232
9 望郷と国籍放棄 275
あとがき 318

さよなら日本——絵本作家・八島太郎と光子の亡命

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 ジュニとトネ

白いアトリエ

太郎と妻の光が、神戸の三宮駅から上り列車にのったのは、昭和十四年二月下旬である。夫婦はともに三十歳。絵かきであった。かれらは東京でしばらくすごしたあと三月四日、横浜港岸壁三番に停泊中の川崎汽船の貨物船・君川丸（九六八一トン）船底の乗組員予備室にもぐりこんだ。見おくり人は光の親友ただひとり、それも東京駅までだった。みぞれ降る空に埋没するかのように軍艦いろにぬりつぶされた船は、その日の午後三時半、錨をあげた。行き先はアメリカである。

日米開戦の二年九ヵ月まえ、日本軍が大陸の奥ふかく侵攻をつづけていたそのころ、まちには日の丸の小旗にかこまれて、「天皇陛下のために死んできます」とちかいながら敬礼する若もののすがた

があり、それら出征兵士のために千人針をぬう女のむれがみられた。わたしは中学一年生であった。

わたしと母と姉は、その数年まえから光の里の笹子さんという家の画塾にかよっていた。そのあたりはいま、神戸市東灘区御影町というが、当時は兵庫県武庫郡御影町といった。貧相な石屋川をはさんで神戸はその西にあった。御影は灘五郷のひとつ。海ぞいには、菊正宗、白鶴をはじめ大小の酒づくりの倉がならび、秋になれば、蔵人(くらうど)たちの哀調をおびた歌声がゆったりとながれていた。風化した花崗岩、つまり御影石の白い砂浜があって海水浴ができた。わずかながら漁家ものこっていた。

しかしそうした古い御影は、せいぜい海岸から北数百メートルの新国道までで、そこから山手の六甲連山の南斜面には、神戸港の繁栄とともにそだったブルジョワジーや、それにむらがる知的職業人の、あるいは豪華な、あるいは瀟洒な住宅がたちならんでいた。おもに外国関係の事件をあつかう弁護士だったわが家や、その裏の英国人の学校教師ハーバート・ラングレー、デビス・カップで名を馳せた商社員・清水善造など、つまりプチブルジョワジーの家は、みんな借家だったが、いまからいえば結構な広さのモダンな西洋館であった。いっぽう、造船、海運、貿易、酒造などの会社社長の家はそろって豪華であった。笹子さんのむかいの貿易商・岩井商店主の家はコンクリートの塔を空高くそびえたたせていた。岩井商店とは、株式会社日商岩井の前身である。

造船技師の笹子さんの家は岩井家の借家だということで、岩井邸とは対照的に手入れのゆきとどかぬボロ家であったが、広い敷地の一隅にたてられたアトリエだけは、うすい灰色のスレートで屋根をふき、まわりの板壁をまっ白のペンキでぬってあった。

このアトリエには、グランドピアノのある音楽室と、彩光に工夫をこらした画室のふた部屋があって、長女・信江が国立音楽学校を、二女・智江が文化学院美術部を、それぞれ卒業するのを待ちかねた父親謹がたてたということだった。

わたしたちがそこにかよいはじめたころ、ネネとよばれていた長女の信江は、新進オペラ歌手としてラジオで放送していた。アトリエでは、ピアノにあわせて美声をふるわせ、恋人らしい青年実業家にレッスンしていた。しかしすでに学校を卒業して、新井光子のペンネームをもつ絵かきになっているという智江のすがたはそこにはなかった、絵の先生は、伊谷先生といった。

当時の二科の新進・伊谷賢造のことである。美学者・中井正一らを中心に戦中、京都で発行された抵抗の雑誌「世界文化」や「土曜日」に表紙の絵やカットをかいた人であり、いまチンパンジー研究で知られる人類学者・伊谷純一郎はその長男にあたる。伊谷先生は口数のすくない、ぶっきらぼうな芸術家肌のひとだった。それだけに子どものわたしは格別のしたしみをもつことはなかったが、笹子さんの家は小学生のわたしにとって天国であった。

戦時下の師範学校付属小学校にかよっていたわたしは放課後、魂が解きはなたれる思いで校門を出るや、海岸よりにあった学校から坂をかけのぼり、その家であそんでゆくのを日課にしていた。そこではわが家以上になにをしてもかまわなかったのである。

笹子さんの家は八人きょうだいで、上四人が女、下四人が男であった。「ノドをいためるからおつけものが食べられない」となげきながら歌うネネの美声によって、わたしは学校の唱歌とは全然ちがう歌があることを知った。三女の恭江はユキちゃんで、わたしがあそびにゆくようになってのちアメ

リカからかえってきた。大学で幼稚園の先生の、そのまた先生になる勉強をしてきたということだった。女のひとにもえらい人がいるんだなと、わたしは思った。

四女の義江は、駐日大使をつとめたこともあるソ連外交官の名をとってヨッフェとよばれ、女学校を卒業したあと薬学専門学校にはいる勉強をしていた。わたしが「口先でごまかしてカネをとる弁護士なんてインチキだ」というと「そうかなあ」といいながら、まともに相手になってくれる親切な姉さんだった。ときどきいなくなるのは〝アカ〟の運動をしているからで、警察につかまって棒でなぐられたという話をきいた。

長男・能のチカちゃんは獣医学校を出たとかで、まともにはたらいているふうはなく、めっぽうブタをかわいがっていた。二男・大典のオーちゃんは旧制高校の生徒だったが、自分のことをわたしといい、体をくねらせて裁縫ばかりしていた。三男・仁ちゃんは、はじめ名門中学にかよっていたがすっかりぐれて、なんども学校をかえた。野球の選手で、その頑健な体がわたしにはうらやましかった。わたしよりひとつ年上の末弟・望はオノフィとよばれ、おとなしい子だったが「警察はいい人もつかまえるんだぞ」といってわたしをおどろかせた。

格別の手入れもしないひろい庭では、四季の草花と雑草が平等に太陽の光をあびていた。ブルドッグやブタやヤギがいて、きょうだいはそれらとたわむれていた。でっぷりとしたママの愛子はいそがしそうで、年をとってちぢんでしまった「おばあさん」は、いつも茶の間でにこやかであった。「ください」というかわりに、「ハイリョウ」(拝領)ということばを使う人だった。瀬戸内海の造船所からときどきかえってくるパパの謹は、子どもたちの仲間にはいって、もっぱら冗談をとばしていた。

小がらで色黒の智江があらわれたのは、わたしが小学校三年生の秋であった。やつれはて、暗い顔をしていた。智ねえさんをちぢめてトネとよばれたかの女は、しばらく奥の間で体をやすめていたが、その年の暮ちかく男の子を生んだ。赤ん坊は信と名づけられ、マコちゃんとよばれた。年があけて、その夫という人物がころがりこんできた。岩松淳といった。大がらで骨太の、男らしい男で、鹿児島男児ということだったが、その人の体もよわりきっていて、しばらくぼんやりしていた。

ほどなくわたしは、こわいうわさをきいた。ふたりは〝アカ〟で、東京の警察のブタ箱にぶちこまれ、さんざんひどい目にあってきたというのだ。「満州事変」のはじまる昭和六年に小学校に入学したわたしは、学校で、万世一系の天皇がおさめたまう神国日本をくつがえそうという〝アカ〟は国賊である、とおしえられていた。両親はいっさいそんなことを口にしなかったが、それでもわたしにとって〝アカ〟共産党はおそろしく、ふたりを遠目でみていた。

やがて白いアトリエの先生は、伊谷先生から岩松淳先生と新井光子先生にかわった。わたしはおそるおそるふたりから絵をならいはじめたのだが、かれらは決しておそろしい人ではなかった。だれかが「光子先生」とよぶと、智江は「トネでいいのよ」と、しずかにいった。岩松淳はいつもニコニコしていて、「淳にいさん」をちぢめてジュニとよばれた。わたしはジュニとトネを両親同様におとなの部類にいれていたのだが、いま勘定してみるとふたりはまだ二十五歳であった。わたしはすぐにジュニとトネが大すきになった。

そのころ学校の図画の時間では、国定教科書の絵を模写させられた。教師は生徒がさわがぬよう机と机の間をあるきまわっていた。おもしろいはずはなく、わたしの図画の点はクラスで最低にちかか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com